

日南市教育研究所

I	研究主題と副題	2-1-1
II	主題設定の理由	2-1-1
III	研究目標	2-1-1
IV	研究仮説	2-1-1
V	研究内容	2-1-1
VI	研究構想	2-1-2
VII	研究組織	2-1-2
VIII	研究の実際	
1	授業実践班の研究	2-1-3
(1)	体験型アクティビティを開発するにあたって	
(2)	体験型アクティビティの学習の進め方について	
ア	授業プラン	
イ	作戦ボードの活用（思考の見える化）	
ウ	評価について	
2	地域連携班の研究	2-1-6
(1)	学習した内容の深化を目的とした地域の企業等と連携した取組	
ア	事前授業	
イ	「グッジョブフェスタ in にちなん」当日	
ウ	「グッジョブフェスタ in にちなん」参加児童のアンケート結果と考察	
エ	事後授業	
(2)	社会人基礎力の必要性にせまる授業	
ア	授業の実際	
イ	社会人基礎力と生徒の学び	
ウ	生徒の変容	
(3)	中学生を対象とした宮崎大学訪問研修	
IX	成果と課題	2-1-9

○ 引用・参考文献

○ 研究同人

研究主題と副題

将来に夢をもち、新時代を生き抜く「4つの学ぶ力」を身に付けた日南っ子の育成
～産学官連携によるキャリア教育の推進を通して～

主題設定の理由

日南市は、「新時代を生き抜く『4つの学ぶ力』を育てる日南教育」をスローガンとして、「他者から学ぶ力」「自ら学ぶ力」「自然から学ぶ力」「社会から学ぶ力」を身に付け、豊かな心と確かな学力を身に付けた児童生徒の育成に取り組んでいる。その具現化のための方策として、小中連携・小中一貫教育による、一貫性・連続性のある教育システムを構築し、9年間を見通した指導を市内全ての小・中学校が進めている。

そのような中、昨年度、本研究所では日南市における授業モデルの構築と実践を目指し、「児童生徒が創り上げる授業の創造」を研究主題として、自ら課題を解決する授業スタイルを具体的に提案するための実践研究を行った。これにより、児童生徒が効果的に学び合うことができるようになる成果が見られたと同時に、課題解決に向けた学び合いの大切さを再認識することができた。一方、社会環境の変化に伴う多様な問題は、子ども達の進路選択や将来設計に大きな影響を与えており、今後、社会全体が連携・協働しながら、キャリア教育の更なる推進を図ることが求められている。

そこで、本年度は、キャリア発達を生涯に渡って続けていくための資質・能力を身に付けた児童生徒の育成を目指し、大学などの専門教育機関や研究機関、地域の企業や事業所、学校、行政による産学官連携を核に共同研究を進め、広い視野で多面的に実践・検証していくことにした。また、産学官連携を推進するにあたっては、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）に着目し、職場や地域社会で活躍する上で必要となる力を育てられるような体験活動を意図的に構築する研究を行うことにした。

以上のようなことより、研究主題を「将来に夢をもち、新時代を生き抜く『4つの学ぶ力』を身に付けた日南っ子の育成」、副題を「産学官連携によるキャリア教育の推進を通して」として、児童生徒が自ら課題を発見し、その課題に主体的に対応し処理していける体験型アクティビティを開発し、授業実践を通して研究の検証を行うことにした。また、地域の人材や企業との連携を図り、授業で学んだことを活用しながら学びを深化させる仕組みづくりを行うことで、児童生徒が働く意義や目的を探究し、自分なりの勤労観・職業観をもつことにつながると考え、本主題を設定した。

研究目標

新時代を生き抜く力「4つの学ぶ力」を軸に、産学官連携を通して、児童生徒に不足しがちな社会性を身に付ける体験活動の充実を目指す。そのために、コミュニケーションの場を意図的・計画的に設定し、自己の問題を発見し解決への見通しをもつ力、コミュニケーション能力、地域社会に参画し他者との関わり方を学ぶ力を育成する方策を究明する。

そこで、体験活動の展開及び指導法について、市内の全ての教職員が誰でも取り組めるような具体的な授業のモデルを示したり、地域全体で子どもの教育に関わる仕組みづくりを行ったりすることで、児童生徒が主体性と創造性をもって自らのキャリア発達を促進しながら、産業界が求める「社会人基礎力」の向上を目指す研究を進める。

研究仮説

1 仮説1

産学官連携による体験型アクティビティを開発し、その活動の指導や評価の在り方を究明することで、児童生徒は自ら課題を発見し、その課題をどのように処理すればよいのかという見通しをもちながら、主体的に取り組むことができるであろう。

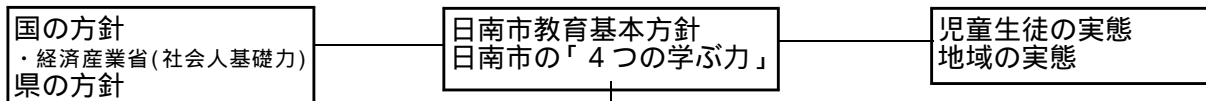
2 仮説2

地域の人材や企業等と連携し、児童生徒に働くことに関する多様な価値観を学ばせたり、実際に仕事を体験させたりする取組を行うことで、働く意義や目的を探究し、自分なりの勤労観・職業観をもつ児童生徒を育てることができるであろう。

研究内容

- 1 「4つの学ぶ力」とキャリア教育との関連
- 2 体験型アクティビティの開発と実践
- 3 地域の企業等と連携した取組
- 4 市内各小・中学校への実践の拡大

研究構想



研究主題

将来に夢をもち、新時代を生き抜く「4つの学ぶ力」を身に付けた日南っ子の育成
～産学官連携によるキャリア教育の推進を通して～

研究目標

新時代を生き抜く力「4つの学ぶ力」を軸に、産学官連携を通して、児童生徒に不足しがちな社会性を身に付ける体験活動の充実を目指す。そのために、コミュニケーションの場を意図的・計画的に設定し、自己の問題を発見し解決への見通しをもつ力、コミュニケーション能力、地域社会に参画し他者との関わり方を学ぶ力を育成する方策を究明する。
そこで、体験活動の展開及び指導法について市内の全ての教職員が誰でも取り組めるような具体的な授業のモデルを示したり、地域全体で子どもの教育に関わる仕組みづくりを行ったりすることで、児童生徒が主体性と創造性をもって自らのキャリア発達を促進しながら、産業界が求める「社会人基礎力」の向上を目指す研究を進める。

研究仮説

仮説 1

産学官連携による体験型アクティビティを開発し、その活動の指導や評価の在り方を究明することで、児童生徒は自ら課題を発見し、その課題をどのように処理すればよいのかという見通しをもちながら、主体的に取り組むことができるであろう。

仮説 2

地域の人材や企業等と連携し、児童生徒に働くことに関する多様な価値観を学ばせたり、実際に仕事を体験させたりする取組を行うことで、働く意義や目的を探求し、自分なりの勤労観・職業観をもつ児童生徒を育むことができるであろう。

研究内容

授業実践研究班

- (1) 体験型アクティビティを開発するにあたって
- (2) 体験型アクティビティの学習の進め方について
 - ア 授業プラン
 - イ 作戦ボードの活用(思考の見える化について)
 - ウ 評価について

地域連携研究班

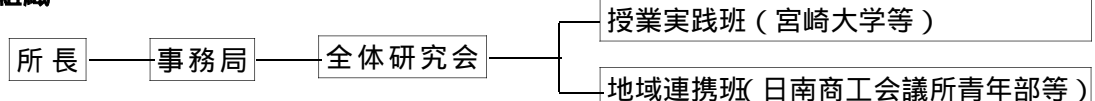
- (1) 学習した内容の深化を目的とした地域の企業等と連携した取組
- (2) 社会人基礎力の必要性にせまる授業
- (3) 中学生を対象とした宮崎大学訪問研修

研究実践

宮崎大学との体験型アクティビティ共同開発
吾田東小学校、吾田中学校の検証授業
授業研究会の実施

日南商工会議所青年部による出前授業
グッジョブフェスタ in にちなん
宮崎大学訪問研修

研究組織



研究の実際

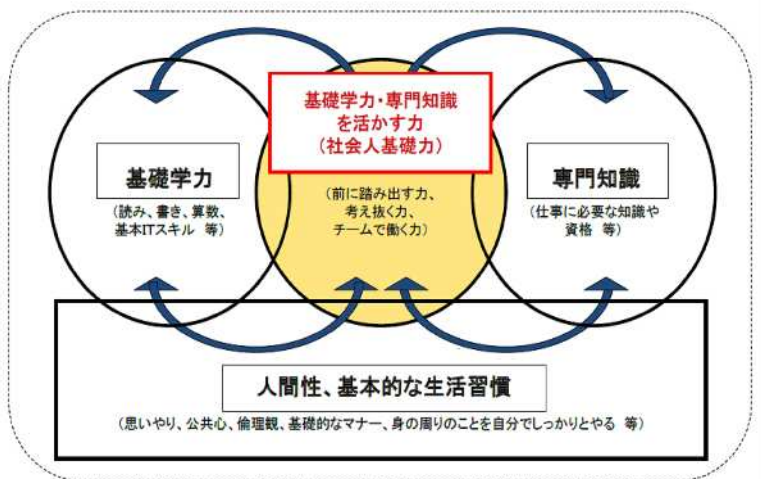
1 授業実践班の研究

(1) 体験型アクティビティを開発するにあたって

これまで本教育研究所では、日南コミュニケーションスキルプログラム（NCP）の教材化及び実践を図ってきた。発達段階に応じたコミュニケーションの在り方を具体的場面で設定し、どのような対処をしていくのかを考えて演習することで、自己肯定感や自尊感情等の高揚を図る教育を推進してきた。本研究は、その応用編として、あるテーマに対して、ゴールイメージをもちながら、他者とのつながりを通して、問題を発見し解決のための方策を具現化できる体験型アクティビティを産学官で共同研究し、実践を通して検証していくというものである。共同研究していく大きな理由は、社会のグローバル化に対応するために、広い視野でキャリア教育の在り方を見つめ人材育成を図っていくためである。共同研究によって開発された体験型アクティビティの実践により、コミュニケーションスキルを高め、人間関係の醸成を図っていくものである。

さらに本研究では、課題解決を図る学習をしていく中で、失敗や困難を経験した時に、どこに問題や課題があるのか、どのような問題なのか等「問題や課題を発見する」ことを重視し、次への手立てや方策を見出す学習の進め方を研究していきたい。

また、職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力として重視されている「社会人基礎力」の考え方を本研究に取り入れていくことにした。その中で重要な能力要素として課題発見力があげられている。この力は、「現状を分析し、目的や課題を明らかにする力」と定義されており、目標に向かって、問題を解決していくために必要な力である。この力は、生産性を高める仕事や生活をよりよくしていく仕事に直結し、働く上で欠かせないものである。しかも、問題や課題を発見して「解決が必要だ」と指摘するところまで含まれ、その先の課題解決にまでつながる重要な能力だと言える。



【資料1 社会人基礎力の全体像】

このように、グローバル化された現在の社会では、指示されたとおりにできる能力の価値は下がり続け、新しいものを生み出す力（創意工夫）が求められる。本研究では、こうした社会に対応できる人材の育成を考え、学習を進めていけるように、グループワークの学習形態モデルを提案し、授業実践できる研究を進めていくことにした。グループワークとは、自分と他者との違いを知り、よいところは吸収し、自分の弱点に気付き是正していくもので、これは、グループなどの集団や組織の中でしか学べないと考える。そこで、こうした学習を実践できる「体験型アクティビティ」を教材化して学習を進めていけるようにした。

- 課題の認識
自分たちに要求されている事は何なのかを正しく理解する。
- 思考と議論
与えられた課題を達成したり問題を解決したり、目標により近づくために、限られた条件（時間、材料、ルール...）をどう使うのか？
まず、自分で考え、グループで議論し、構想を練り、計画を立てる。
- 試行錯誤
ア とりあえず、やってみる。
イ そこから各種情報を集める。
ウ 情報を整理し現象を理解する。
エ 分かったこと、新たな疑問から次に何をするのか決める。
オ 次を試してみる。
カ 疑問がなくなるまで繰り返す。
- 検証
試行錯誤の結果を総合判断し、最良と考える方法で、その性能を試す・把握する。
- 評価
自分やグループの出来を評価し共有する。グループ間差も議論する。

【資料2 体験型アクティビティの学習の進め方】

(2) 体験型アクティビティの学習の進め方について

ア 授業プラン

指導者にとって実践しやすく、また、児童生徒の諸能力を高めるための効果的な授業の進め方はどうあればよいか、実践を通しながら「授業プラン」についての研究を進めた。

授業プランには、各アクティビティと諸能力との関連を踏まえた上で、「活動のねらい」を示すようにした。指導者は、「本時の学習プラン」および「活動のねらい」を把握し授業を進めていくことになる。実際の授業展開を学習指導展開例として「導入、展開、まとめ」の3段階で作成した。

活動名	紙タワーを作ろう(1時間)		対象学年	小5・6年
日商の4つの学び	A 他者から学ぶ力	B 自ら学ぶ力	C 自然から学ぶ力	D 社会から学ぶ力
社会人基礎力	1 前に踏み出す力 2 考え抜く力 3 チームで働く力			
基礎的・汎用的能力	ア 人間関係形成・社会形成能力 仲間と関わる力	イ 自己理解・自己管理能力 役割を考えたり行動したりする力	ウ 課題対応能力 考え抜く力	エ キャリアプランニング能力 先を見通す力・将来を思い描く力
本時の学習プラン	A - 3 - A			
活動のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全員が参加せざるを得ない4人1組で課題に取り組むことを通して、アイデアを共感的に理解する力をつける。 ○ 考えていた作り方では高く作れないと分かったときに、作業の途中で自分たちのやり方を変えることに目を向ける。 ○ 仕事は一人ですというより、チームで取り組むことを理解する。 			
準備物	B5用紙(各班に30枚、練習用1人1枚) はさみ(各自) ものさし ワークシート 作戦ボード(各班1枚) ペン 掲示資料 ストップウォッチまたはタイマー			
学習指導展開例				
時間	主な学習活動と内容	指導上の留意点	評価	
導入 8分	1 学習問題を理解し、学習の見通しをもつ。 (1) 授業のねらいについて (2) 紙タワーについて ①課題の認識	<ul style="list-style-type: none"> ○ 活動の内容や、グループ編成、材料についての説明を行う。 ○ 紙タワーについての説明を行う。実態に応じて、児童とやりとりをしながら実際に紙を折って立てて見せ、イメージがもてるようにする。 ○ 活動の流れについては視覚的に分かるようにし、児童がいつでも振り返ることができるようにする。 		
	3 グループに分かれて紙タワーをどのように作るか考える。(5分) ②思考と議論	<ul style="list-style-type: none"> ○ 練習用の紙1枚ずつを使って、どうすれば高いタワーができるか考えさせる。 ○ 出た意見を作戦ボードに記入し、振り返りに活かせるよう発言者の名前も記入させておく。 ○ 問題点を見つけ、どうすれば改善できるかを話し合っているグループを取り上げ、話し合いの仕方のモデルとして全体に紹介する。 ○ 共感や、納得などねらいで示された約束を意図しているグループを称賛し、全体にも広げるようにする。 ○ 他の班の良いところは取り入れて良いこととし、いろいろな発想を試しながら作り上げていく過程を意図させる。 	自分の考えを伝えたり、役割を見つけたりして活動に参加している。 (発言・行動)	
	4 紙タワーを作る。(15分) ③試行錯誤	<ul style="list-style-type: none"> ○ 問題点を見つけ、どうすれば改善できるかを話し合っているグループを取り上げ、話し合いの仕方のモデルとして全体に紹介する。 ○ 共感や、納得などねらいで示された約束を意図しているグループを称賛し、全体にも広げるようにする。 ○ 他の班の良いところは取り入れて良いこととし、いろいろな発想を試しながら作り上げていく過程を意図させる。 	友だちの考えを肯定的に受け止めている。 (発言・反響)	課題を達成させるために、計画を見直したり、よい考えを取り入れたりすることができる。 (発言・行動)
展開 30分	5 紙タワーの高さを測定する。(3分) ④ 検証	<ul style="list-style-type: none"> ○ 目視で確認できない場合は、ものさしを使って調べる。 		
	6 自分たちがどのようにタワーを作ったのか、説明する。(7分)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分たちがどんなアイデアを出し合ったのか、上手くいかないときにどう改善したのかについて、作戦ボードを使って説明させる。 		
まとめ 7分	7 本時の活動について振り返る。 ○ ねらいについての振り返り ○ 友だちのよさの発表 ⑤ 評価	<ul style="list-style-type: none"> ○ グループ活動の様子や友だちのよさについて振り返らせる。 ○ 結果だけにこだわらないよう、活動の中で児童の良さを取り上げて、価値付ける。 ○ ワークシートを使って、今日の学びについて振り返らせる。 		

になる。実際の授業展開を学習指導展開例として「導入、展開、まとめ」の3段階で作成した。

(7) 導入

導入においては、具体物を用いたり場面設定を工夫したりして課題に対して具体的なイメージをもたせ、自分たちに求められている課題をつかませる。また、活動のねらいや授業の流れについて説明し、児童生徒が見通しをもって主体的に取り組めるようにする。

(4) 展開

展開では、まず、与えられた課題を解決するための方法や手順について、個人やグループで考えさせたり、議論を行わせたりする。発達の段階によっては、実際に触れたり作ったりしながら思考させることも考えられる。次に、話し合ったことをもとに試行錯誤を繰り返しながら実際に作っていく作業に取り組ませる。その過程で創意工夫が生まれるよう、発達の段階に応じて材料や時間等の条件を与えるようにする。児童生徒が活動している場面では、ねらいに即した活動になっているか、役割分担をしているか、互いにコミュニケーションをとりながら進めているかを確認する。最後に、条件に合ったものができたかについて、全体の場で検証を行う。

(9) まとめ

まとめでは、結果だけでなく、作業の過程において新たな課題を見つけたり友だちの良さに気付いたりできたか、活動のねらいにそって振り返らせるようにする。また、児童生徒だけでは気付けない良さについて指導者が取り上げて称賛し、児童生徒の行動や発言を価値付ける。

【資料3 授業プランの実際】

イ 作戦ボードの活用（思考の見える化）

グループ活動の中で出されたアイデアや改善点を記録し、その内容を他者へ伝えていくために「作戦ボード」と名付けた記録用紙を活用する。記入事項は、作成のポイントや工夫点、完成イメージ図をもとにした詳細部分の説明、問題点や改善点である。（資料4）

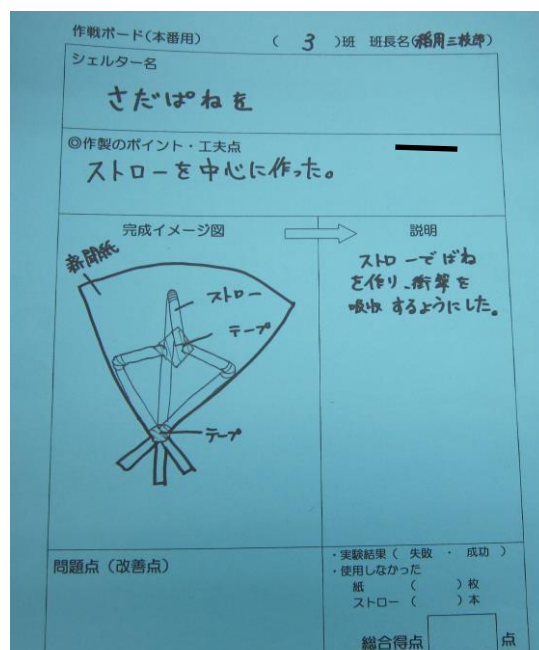
これにより、児童生徒の思考の軌跡を残しながら、工夫点や改善点のポイントを明らかにすることができる。また、用紙を見ながら効率よく製作活動に取り組むことができること、プレゼンテーションで使用できること、グループ内での役割や出番を増やすことができることも期待できる。生徒は「作戦ボード」をもとに製作活動を進めるが、指導者はグループ内で完成イメージ図が共有されているか、作成のポイントを共通理解できているかを確認する必要がある。完成イメージ図が無ければ、一部のメンバーのみの考えで作業が進むことになり、グループ活動の趣旨が失われてしまう。（資料5）

作戦ボードの記録者は、グループの話合いによって出されたアイデアや改善点、修正点を把握して分かりやすく記入していく。その際、指導者は、作戦ボードを後のプレゼンテーションでも活用することを事前に指導し、他者が見ても分かりやすく伝えるものを意識させる。また、工夫点や改善点は色分けをして記入するなど、創意工夫を促していくことも必要である。

作戦ボードを使用してプレゼンテーションを行う際には、発表者に作戦ボードの完成イメージ図と実際の作品を提示して比較させながら、製作過程での工夫点や修正点などを説明するように教示する。（資料6）特に、外見からだけでは確認できない内部構造については、作戦ボードを活用して説明できるように事前に指導しておく、児童生徒も取り組みやすくなる。

ウ 評価について

本学習では、指導者が製作活動中の児童生徒の取組の様子を見て、会話の内容や作業に取り組む姿勢を観察しながら評価することが中心となる。話合いが活発であり、メンバー同士の帰属意識が高いグループはその場で称賛し、全体の場でも評価すると他の生徒の意欲も高まる。また、まとめの場面で自身の取組を振り返る自己評価や、グループ内での関わり合いを見るための相互評価を取り入れるとよい。作戦ボードについては、記入されている内容が再現性のあるものであるか、完成イメージ図と実物の工夫点や修正点が一致しているかを視点に評価を行う。プレゼンテーションの発表は、声の大きさや分かりやすさ、説得力などの視点から評価を行う。



【資料4 生徒が作成した作戦ボード】



【資料5 作戦ボードを活用した話合い】



【資料6 作戦ボードを利用したプレゼン】

2 地域連携班の研究

本研究班は、4つの学ぶ力の「社会から学ぶ力」の育成を中心に掲げ、地域企業や日南商工会議所青年部と連携しながら研究を行った。その中で経済産業省が発表した「社会人基礎力」を基に以下の能力を抽出して研究を進めた。この社会人基礎力の育成を目指し、小学生を対象とした職業体験や中学生を対象とした日南商工会議所青年部の職業講話、宮崎大学訪問研修を行った。これらの取組は、児童生徒が地域社会と関わりながら多様な価値観に触れ、働く意義や目的を探究し、自分なりの勤労観や職業観を育む役割を担うものといえる。

社会人基礎力（能力）	社会人基礎力（能力要素）
「前に踏み出す力」（アクション） ～ 一歩前に踏み出し、 失敗しても粘り強く取り組む力 ～	①主体性：物事に進んで取り組む力 ②実行力：目的を設定し確実に行動する力
「考え抜く力」（シンキング） ～ 疑問を持ち、考え抜く力 ～	①課題発見力：現状を分析し目的や課題を 明らかにする力 ②創造力：新しい価値を生み出す力
「チームで働く力」（チームワーク） ～ 多様な人とともに、 目標に向けて協力する力 ～	①傾聴力：相手の意見を丁寧に聴く力 ②規律性：社会のルールや人との約束を守る力

【資料7 抽出した社会人基礎力の能力要素】

(1) 学習した内容の深化を目的とした地域の企業等と連携した取組

児童の職業観の向上を目指す「産学官連携によるキャリア教育の推進」を具現化するために、12月20日（日）に日南市まなびピアにおいて「グッジョブフェスタ in にちなん」を開催した。この取組では、日南市内の各企業や各事業所に協力を仰ぎ、体験活動を重視した働くことに関する学びの場として、20のブースを設けることができた。また、開催にあたっては、小学校における社会科の授業や総合的な学習の時間との関連を図りながら、より教育効果を高められるように、研究員の勤務校において、働くことをテーマとした事前授業を行った。そして、さらには、参加した児童の職業観に関する変容を検証するために、事後授業も実践した。

ア 事前授業

児童が職業や働くことについて考える機会となるよう、学級活動の時間で指導を行った。授業では、将来職業に就くことと学校や家庭で自分の役割を果たすことを関連させながら、働くことについて考えさせたが、児童の多くからは、「生活のため」や「お金のため」という意見が出された。

イ 「グッジョブフェスタ in にちなん」当日

参加児童79名は、高校生ボランティアと保護者が見守る中、会場内の各ブースに分かれて、体験や講話を盛り込んだ活動に取り組んだ。

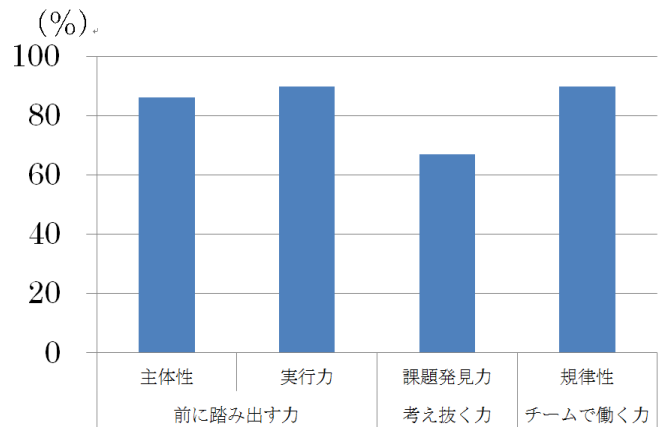


【資料8 「グッジョブフェスタ in にちなん」の様子】

児童は、インタビューした内容や感想をしおりに記入しながら、興味のあるブースを巡った。オリエンテーションの中で児童に「働くとはどのようなことだろうか。」とめあてをもたせることで、児童は積極的に事業者と関わりをもち、働くことの意義や事業者の思いや願いを尋ねることができた。

ウ 「グッジョブフェスタ in にちなん」参加児童のアンケート結果と考察

参加児童79名のアンケートから、児童が感じた体験による能力の高まりを「社会人基礎力」をもとに検証した。高い割合を示しているのが、主体性や実行力を能力要素とする「前に踏み出す力」である。8割以上の児童がこの取組で身に付いたと答えたのは、体験を重視した活動が多かったことによると推察される。また、「働くとはどのようなことだろうか」というめあてに対し、



【資料9 事業後に行ったアンケート】

「お金をもらうだけではなく、人のために働く」や「自分の成長のために働くことがわかった。」などの意見が多く書かれていた。さらに、「将来、地元に関わる仕事をしたい。」という感想も見られ、地域の大人と関わることで多様な価値観を生む一助となった。

エ 事後授業

「グッジョブフェスタ in にちなん」に参加した児童の変容を学級に拓げるために、事後の授業を行った。事前のアンケートでは、「生活のため」や「お金のため」という児童が多かったが、この取組に参加した児童の感想を聞く中で、「働くとは、本当に生活のためだけだろうか。」という問いに対し、生活のためだけでなく、「人に笑顔を与えるため」や「自分のスキルを伸ばしていくため」などの考えが全体に広まり、働くことの意義について、多様な価値観を理解することができた。

(2) 社会人基礎力の必要性にせまる授業（酒谷中学校における実践）

中学生に社会人基礎力の必要性を学ぶ場として、学級活動の授業において職業講話を実施した。この職業講話は、研究員の勤務校において、7月に行った職場体験学習での学びを深化・統合させることをねらって計画した。職場体験学習での学びが、1つの学校行事で終わることがないように、働くことについて興味を抱き始めた際に、多くの社会人から体験をもとにした成功談や失敗談などを話していただくことで、自分なりの職業観や勤労観を育むと同時に、社会人基礎力の必要性に気付かせたいと思い、本時を設定した。



【資料10 職業講話の様子】

ア 授業の実際

授業では、5名の社会人の方が来校され、自己紹介の後、働くことについて2名の講師の方にそれぞれ8分の講話をしていただいた。その後、2つのグループに分かれて「働くこと」や「これから必要な力」など、生徒の質問に答える座談会を20分間行った。最後にまとめを行い、授業を終えた。保護者や学校の先生とは異なる立場の方から話を聴くことができ、子どもたちにとって非常に有意義な時間であった。

イ 社会人基礎力と生徒の学び

本時における生徒の学びと社会人基礎力の関連は以下のとおりである。

	前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力
生徒の学び	<ul style="list-style-type: none"> ○ 外に出て、地元の良さを知る。 ○ がんばった分だけお金になる。 ○ 言葉遣いに気を付ける。 ○ 飛び込む勇気をもつこと。飛び込むと新しい発見につながる！！ ○ 中学生のときから、夢を叶えるための準備をする。 ○ どの職業でも相手が何を求めているか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ うまくいかないときは「とにかく行動して、考える」 ○ 勉強は一生ついてくるものだから、今のうちから好きになる！ ○ 学ぶ意欲をもち続ける。 ○ 先を見通すことも中学生のうちからしておくとうい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自己表現の大切さ ○ 笑顔・相手を観察することを心掛ける。 ○ 『ありがとう』を伝える。 ○ 仕事の楽しみは人それぞれで見つけるもの ○ 接客業は、まず国語力・コミュニケーション・報連相 ○ 約束は絶対に守る。 ○ 英語が話せるようになっていくといい。

【資料11 生徒の学びと社会人基礎力の関連】

ウ 生徒の変容

今回の職業講話を通して、生徒の心に一番心に残ったことは、「勉強は一生ついてくるものだから、今のうちから好きになる！」ということであった。この言葉があり、その後の2学期末テストでは、家庭学習にも集中して取り組み（平日：2年生1.9時間、3年生3.6時間 休日：2年生3.3時間、3年生6.3時間）、全体の合計点数が2学期中間テストから13.5%アップした。また、2年生を対象とした高等学校のオープンスクールにも全員参加したり、地域のボランティア活動などにも積極的に参加したりするなど職業講話が将来の目標に向けて意識を高めることにつながったと感じる。

(3) 中学生を対象とした宮崎大学訪問研修

本市においては、将来のキャリアデザインを構築させるにあたって、高等学校から先の進路が見えにくいことや、市内普通科高校への進学率低下、地域における将来の医師不足といった様々な課題がある。将来、社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を身に付け、郷土に愛着と誇りをもたせることをねらいとし、市内の中学生（希望者）を対象に、宮崎大学及び宮崎市立田野病院への視察研修を実施した。宮崎大学工学部で実際に最先端の研究に触れたり、田野病院で、病院内の様々な職種の方に話を聞いたりすることができた。



【資料12 宮崎大学工学部での体験】

参加した生徒は将来、機械やロボット関係の仕事や、医師、看護師を目指している生徒もいれば、「夢は決まっていないが、大学がどんなところか知りたい」、「視野を広げたい。」と参加した生徒もいた。この研修を通して、生徒は新たな職業を知ったり、将来についてより深い興味や明確な目標を抱いたりすることができた。

生徒の感想
<ul style="list-style-type: none"> ○ 短い時間でしたが、学んだことは普通の日の何倍、何十倍なのかも分からないくらいです。 ○ 国立大学のロボティクス学科はここだけだと聞いたので進みたいと思いました。 ○ もっと自分で調べたり実験したりしたいと興味をもちました。 ○ 知らなかった、ソーシャルワーカーという仕事を知れて良かったです。 ○ たくさんの方がいて、一人一人の患者さんへサポートしていく、こんなに人が動いていることを知って、とても魅力的な職場だと憧れました。 ○ 自分の進路決定や将来のことについて役立ついい機会でした。 ○ 今回の研修を受けたおかげで、少し自分の将来の夢が開けた気がします。

IX 研究の成果と課題

1 授業実践班

仮説 1

産学官連携による体験型アクティビティを開発し、その活動の指導や評価の在り方を究明することで、児童生徒は自ら課題を発見し、その課題をどのように処理すればよいのかという見通しをもちながら、主体的に取り組むことができるであろう。

(1) 成果

- 産学官連携を図りながら、体験型アクティビティについての教材研究及び開発を行ったことで、社会や企業が求める人材育成の在り方を深めることができた。
- 体験型アクティビティの実践を通して、集団内の児童生徒同士の関わりが活性化され、児童生徒の「他者から学ぶ力」「自ら学ぶ力」の育成につながった。
- 体験型アクティビティの活動に伴う作戦ボードや評価シート等の準備により、児童生徒は活動を通して、活動そのものを客観的に振り返りながら、目の前の課題を発見したり、成果を実感したりすることができ、そのことが社会性につながる自己理解や他者理解につながった。

(2) 課題

- 体験型アクティビティについては、学年や校種別に応じた教材の開発や系統立てた活用法について更に研究していく必要がある。
- 地域資源や地域人材等を活用した体験型アクティビティの共同研究や実践等ができるネットワークを構築していく必要がある。

2 地域連携班

仮説 2

地域の人材や企業等と連携し、児童生徒に働くことに関する多様な価値観を学ばせたり、実際に仕事を体験させたりする取組を行うことで、働く意義や目的を探究し、自分なりの勤労観・職業観をもつ児童生徒を育てることができるであろう。

(1) 成果

- 商工会議所青年部の協力があり、地域ぐるみで子どもを育てる環境ができた。
- 地域企業の方の講話を聞き、将来を見据えることで、子どもたちの学ぶ意欲が高まった。
- 学校外における地域の活動に教職員が関わることで、地域の特色を学校教育に関連させることができ、さらに学びが深まると感じた。
- 「社会から学ぶ力」を育てるための様々な取組を行うことで、勤労に対する広い見方や考え方をもち、自分の将来に向き合うことにつながった。

(2) 課題

- 社会人基礎力には意欲の面の能力が記されていないため、キャリアプランニング能力の観点からの評価も含めて社会に必要な力を研究していく必要がある。
- 教職員も視野を広げて、企業のことを学ぶことが大切だと感じた。
- 「グッジョブフェスタ in にちなん」について、対象を小学5、6年としたが、企業等から中学生や高校生にも実施したいという意見があった。対象学年について検討する必要がある。

【引用・参考文献】

- | | |
|------------------------------|-----------|
| ・ 小学校キャリア教育の手引き（改訂版） | 文部科学省 |
| ・ 学校基本調査 | 文部科学省 |
| ・ 自分に気付き、未来を築くキャリア教育 | 国立教育行政研究所 |
| ・ キャリア教育を「デザイン」する | 国立教育行政研究所 |
| ・ キャリア教育を創る | 国立教育行政研究所 |
| ・ キャリア教育ガイドブック | 経済産業省 |
| ・ キャリア教育支援ガイドブック | 経済産業省 |
| ・ 全国家庭児童調査 | 厚生労働省 |
| ・ 青少年のインターネット利用環境実態調査 | 内閣府 |
| ・ 小・中・高等学校12年間を見通した宮崎のキャリア教育 | 宮崎県教育委員会 |
| ・ 新時代を生き抜く「4つの学ぶ力」を育てる！！ | 日南市教育委員会 |
| ・ キャリア教育のススメ | 東京書籍 |

【研究同人】

- | | | | |
|-----|-------|------------|---------|
| 所長 | 黒木 康英 | (日南市教育委員会) | 教育長 |
| 副所長 | 沼田 重明 | (日南市教育委員会) | 学校教育担当監 |
| 事務局 | 西岡 雅弘 | (日南市教育委員会) | 指導主事 |
| | 中條 隆裕 | (日南市教育委員会) | 指導主事 |
| | 加治屋輝昭 | (日南市教育委員会) | 指導主事 |

研究員

授業実践班

- | | |
|-------|-------------|
| 日高 康州 | (北郷小中学校 教頭) |
| 若松 宏一 | (吾田東小学校 教諭) |
| 重山 兼滋 | (吾田小学校 教諭) |
| 平山 肥見 | (南郷小学校 教諭) |
| 岩崎 竜太 | (飫肥中学校 教諭) |
| 矢野 雄大 | (吾田中学校 教諭) |

地域連携班

- | | |
|-------|------------|
| 矢野根育代 | (吾田小学校 教頭) |
| 笠 大輔 | (酒谷中学校 教諭) |
| 矢野 雄一 | (油津小学校 教諭) |
| 真方 悟史 | (榎原小学校 教諭) |
| 椎屋 裕貴 | (南郷中学校 教諭) |
| 泉 真紀 | (榎原中学校 教諭) |

研究アドバイザー

- | | |
|-------|---------------------------|
| 竹内 元 | (宮崎大学大学院教育研究科教職実践開発専攻准教授) |
| 太田 泰晴 | (株式会社オフィスナガトモ教育事業部・企画室長) |